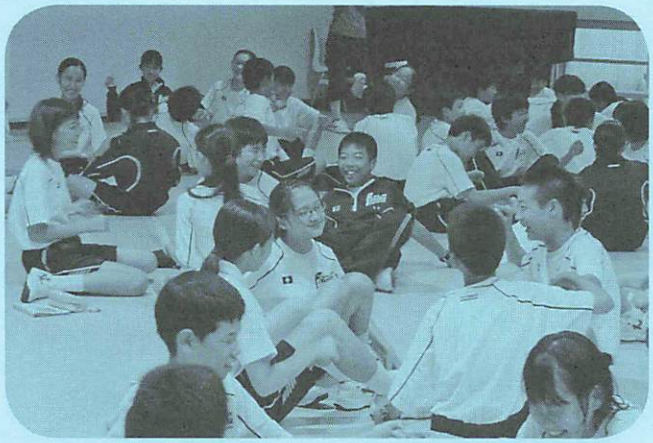
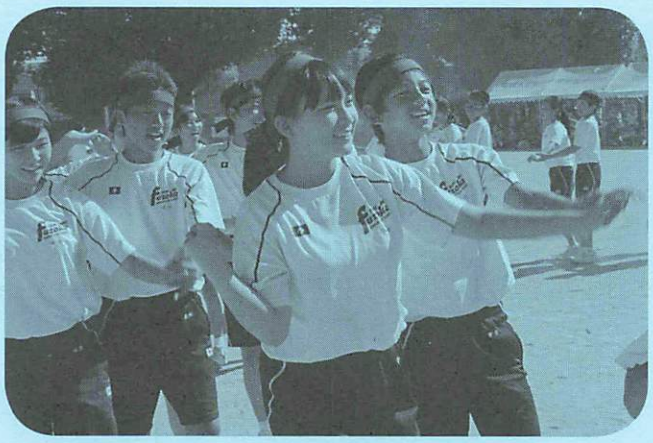
第Ⅰ部
基本構想







研究主題

持続可能な社会の形成に向け，自らを活かす生徒の育成
～すべての生徒が伸びる学びの追求～

（３か年研究２年次）

１　本附属学校園における研究の方向性

愛媛大学は，大学憲章において「豊かな創造性，人間性，社会性を備え，次代を担う自覚と誇りをもつ優れた人材を社会に送り出すことを最大の使命とする。」と謳っている。このことは，附属学校園で軌を一にして果たすべき使命でもある。この使命を果たすべく，教育学部附属学校園では，「未来を拓く力の育成」を共通主題として掲げ研究実践をすすめている。附属の各学校園は，学校段階も異なり，子どもたちのもつ特性も違う。だからこそ，各学校園の特性及び学校園間の系統性や連続性を踏まえて，それぞれの発達段階や子どもたちの特性に応じて，一人一人の「未来を拓く力」をどう捉えればよいのか，そして「未来を拓く力」を育むにはどのようにすればよいのかを連携して研究・実践を積み重ねている。

２　研究主題設定の理由

(1)　なぜ「持続可能な社会」を意識した研究が必要なのか？

1992年の国連環境開発会議（地球サミット）で，持続可能な開発のための教育の重要性とその取組の指針が示された。さらに持続可能な開発に関する世界首脳会議（ヨハネスブルクサミット）に関わって，2005年から2014年の10年間を「持続可能な開発のための教育の10年」いわゆる「ＥＳＤ（Education For Sustainable Development）の10年」とすることを日本が提案し採択された。

ＥＳＤの目標については，2006年３月に「国連持続可能な開発のための教育の10年」関連省庁連絡会議が示した「実施計画」（以下「ＥＳＤの10年実施計画」）に次のように書かれている。

> ＥＳＤの目標は，すべての人が質の高い教育の恩恵を享受し，また，持続可能な開発のために求められる原則，価値観及び行動が，あらゆる教育や学びの場に取り込まれ，環境，経済，社会の面において行動の変革をもたらすことです。

この目標を達成するため，我が国では，外務省，ＪＩＣＡ，環境省，文部科学省，日本ユネスコ国内委員会など政府機関が担当し，民間でもＥＳＤ－Ｊ（「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議）などのＮＰＯ，日本ユネスコ協会などの団体が関わっている。このようにＥＳＤは，我が国において官民一体となって進められている動きであり，また，国際連合またはユネスコといった国際機関を中心に世界的に進められているものである。換言すれば，ＥＳＤが目指している価値観や行動の変革は，世界中が一体となって進めているものだといえる。

こうした動きは，裏返すと，現代における持続可能性への危機が深刻な状況であり，「持続可能な社会」つまり「将来の世代のニーズを満たす能力を損なうことなく，現代の世代のニーズを満たすような社会づくり」（ＥＳＤの10年実施計画）の実現が人類の喫緊の課題となっていることを物語っている。

このような情勢の中で，本附属学校園の共通目標に掲げた「未来を拓く力」を，義務教育の最終段階を担う本校では「持続可能な社会の形成に向け，主体的に行動できる力」と捉え，これを育むための効果的・効率的な学習活動を展開することが，先に述べた本附属学校園の使命を果たすことにつながると考えている。

(2) どのような子どもを育てていくのか？

持続可能な社会を形成するためには，目先のことだけに心を奪われ，自分の利益のために生きるのではなく，社会全体を見渡す広い視野と先を見通す力，物事の本質を見抜く力をもたなければならない。と同時に，周りを自分と同じように大切に思える豊かな心を培う必要がある。さらに，「今ここにいる自分」のみならず，人・自然・社会とのつながりの中で「これから生きていく私」を自覚しながら，「社会参加」ではなく，自らを活かして「社会参画」できる人間を育成する必要がある。

このような観点から，「持続可能な社会の形成に向け，主体的に行動できる」ためには，次の「自立」及び「共生」の力を育まなければならないと考えた。[1]

【持続可能な社会を形成するための「自立」の力】
- ○ 広い視野で物事を客観的に判断する力
- ○ 問題の本質を見抜く力
- ○ 理想の自分や社会の姿を思い描く力
- ○ 実現に向け粘り強くチャレンジし続ける力
- ○ 課題解決に向け，自ら考え，見通しをもって解決する力
- ○ 解決の過程や結果を振り返って修正・改善する力
- ○ 自分の気持ちや考えを表現し，伝える力

【持続可能な社会を形成するための「共生」の力】
- ○ 多様な価値観を認める力
- ○ 互いの個性を尊重する力
- ○ 社会の形成者としての自覚をもち，他と協調しながら自ら進んで行動する力
- ○ 現在，そして将来にわたり社会的・経済的に公正な社会を築こうとする力

これらの力については，これまでの研究実践の成果から，次のことが明らかになっている。

① 「自立」の力や「共生」の力は，それ単独で育てることは難しく，それぞれの力が相互補完的に高まっていく。
② 「自立」の力や「共生」の力が確かな行動力として発揮されるためには，自尊感情が豊かに醸成されなければならない。

これらの成果や本校生徒の実態等[2]を踏まえるとともに，愛媛大学が定める教育理念に基づき，研究１年次の昨年度から本校の教育目標と望ましい子ども像を次のように設定し，実践研究を積み重ねている。

(本校の教育目標と望ましい子ども像)

【教育目標】 自立と共生の力をもつ生徒の育成

【望ましい子ども像】
- ○ 真理を求める探究心をもって，物事を多面的・多角的に考察し，その学びを楽しもうとする
- ○ 自信と誇りをもって，可能性に挑戦し続けようとする
- ○ 豊かな感性や表現力と他者を尊重する心をもち，積極的に自己を開いて他者に働き掛けようとする

持続可能な社会を形成するためには，「１から10」を正確迅速に処理できる能力よりも，「０から１」を生み出す力こそが重要である。ここに掲げた子ども像は，前述した「自立と共生の力」が育った生徒の姿であり，「０から１」を生み出す人間の姿であると考える。すなわち，持続可能な社会の形成に向け，自らを活かして「社会参画」するうえでの基盤となる資質や能力をもった人間の姿だと考えるのである。

(3) これまでの研究の歩みをどのように生かすのか？

教育実践研究は，階段を一段一段駆け上がるように成果が上がるようなものではなく，繰り返し繰り返し実践を反復し，その反復の中に発見や再創造を創出しながらこそ，はじめてその成果が上がるものである。したがって，これまで培ったものが，螺旋形で高まっていくような実践研究を，今後も積み重ねなければならないと考えている。

本校では，前研究主題「持続可能な社会を築くための，自立と共生の力を育む指導」を研究テーマに掲げ，本校の教育活動をＥＳＤの視点で見直し，「人と人とのつながり」「人と自然とのつながり」「人と社会とのつながり」を重視する教育活動を展開し，大きな研究成果を得ることができた。[3] しかしながら，次のような課題もあげられた。

> ３年間の生徒の育ちには大変大きなものがあった。一方で，多くの生徒が育っていくなかで，仮に行き詰まっている生徒が生じてしまうと，集団の中では，相対的に「異質の存在」となりやすく，疎外感が強くなる恐れがある。すべての生徒が伸び悩みや行き詰まりを感じることなく，生き生きと自分を発揮できる学びの場を創造していかなければならない。

このことから，本校の教育目標，及び，望ましい子ども像に迫るためには，次の点には特に留意して研究・実践を進めなければならないと考える。

(研究実践の要諦)

> ○ すべての生徒の確かな行動力としての「自立と共生の力」を着実に育む教育活動の展開
> →子ども像の「○○しようとする」が育つ，効果的な教育活動の研究・実践
> ○ 伸び悩みや行き詰まりを感じる生徒を出さない学習指導の工夫
> →これまでよりもさらに質の高い学びの場の創造

以上のように，今日の教育的課題，本校の教育目標と望ましい子ども像，これまでの研究成果や課題を踏まえ，昨年次より研究主題を「持続可能な社会の形成に向け，自らを活かす生徒の育成～すべての生徒が伸びる学びの追求～」とし，研究実践を進めている。また，先に挙げた「自立」や「共生」の力は，次期学習指導要領の枠組み作りに向け文部科学省にて開かれた「育成すべき資質･能力を踏まえた教育目標･内容と評価に関する検討会」（2014年３月）において，今後，教科を横断してその育成が求められているものばかりである。このような「自立と共生の力」をいかに育むかについて，各教科領域で具体的に明らかにしていくことは，たいへん意義深いことだと考える。

３ 研究１年次の成果と課題

(1) 成果

次の表は，昨年次各教科領域において展開された研究実践の一部を，研究主題を具現化するための柱とした，①授業の質をいかに高めるか，②いかに学びの集団を形成するか，に沿ってまとめたものである。

教科領域	研究主題の具現化に向けたアプローチ（一部） (①授業の質をいかに高めるか　②いかに学びの集団を形成するか)
国　語	①　見方や考え方，価値観の多様性を実感させる学習指導方法の工夫 ②　自分が感じたことや自分なりの表現を生き生きと発揮させるとともに，その良さから学び合う場の充実
社　会	①　多面的・多角的に追究させることのできる問題解決的な学習の展開 ②　各自の学習成果の可視化とそれを互いに活かし合える学習活動の充実
数　学	①　問題解決に粘り強く取り組むことができる題材及び学習指導方法の工夫 ②　学んだり高まったりした見方や考え方を発揮・共有させる手立ての工夫
理　科	①　探求意欲を継続させる学習課題の設定や主体的な学びを引き出すための学習指導の工夫 ②　コミュニケーションボードの活用等による集団で学び合う活動の充実
音　楽	①　学習内容を活用して音楽表現をさせる学習指導の工夫 ②　自分たちの手で音楽を作りあげる体験の積み重ね
美　術	①　豊かな感性の育ちを目指した，感情やイメージを直感的に捉えさせる視覚的アプローチ ②　積極的に自己を開いて他者に働き掛けることを促進する，ＩＣＴを活用したビジュアルコミュニケーション
保健体育	①　運動の本質的な魅力に触れさせることにより，運動有能感を高める授業展開 ②　各自及び相互の成長を促す，ＩＣＴ活用による視覚的なフィードバック
技　術	①　自己学習力及び社会や環境との関わりの中で物事を判断する力を育成する学習活動の展開 ②　問題解決学習における小集団学習の効果的・効率的な設定とＩＣＴの活用
家　庭	①　問題解決的な学習の効果的な位置付けと思考の過程や結果を見取りやすくするワークシートの工夫 ②　互いの気付きを活かす学習指導方法の工夫
英　語	①　より豊かな自己表現を実現する表現活動の展開 ②　互いの良さを認め合ったり，協力し合ったりする場の充実
行く河	①　心の能力を高める学習活動の展開 ②　傾聴トレーニングや間接的に自分を見つめさせる活動の効果的な設定

これらを含め，各教科領域において多様な実践が積み重ねられたことにより，自らを活かすことが，問題（課題）の解決，及び，よりよい集団（社会）の形成につながり，ひいては自己の成長につながる，との実感を多くの生徒にもたせることができた。このことは，「望ましい子ども像」に掲げた「○○しようとする生徒」を育成する上で大きな意味をもつ。それは，これまで他者とともに学ぶことについて，「他者から得た学び」を中心にその有用性を語ることが多かった生徒が，「自分を活かす」ことが，「自らの学び」や「他者の学び」にとって非常に大切であるこ

とを認識するようになったからである。「自分を活かす」ことの意味や意義への自覚の高まりを生徒にもたらしたことは，ＥＳＤの目標に掲げられた価値観や行動の変革に資する成果であるとも言える。

これらのことから，「生徒を活かす」ことによって「生徒が伸びる」ことを重視した教育活動を展開することが，本校の研究主題を具現化する上での確かな実践であることを明確にすることができた。

(2) 課題

昨年度の生徒の育ちについて，本校が採用した生徒の事態調査「生徒理解ための調査Multi（マルチ）」（大阪心理出版）等を分析した結果[4]，次のような実態が明らかとなった。

○ 約８％の固定化された生徒が伸び悩みや行き詰まりを感じている。前年度よりも割合が減ったものの，この課題は「すべての生徒が伸びる」の観点から見てたいへん大きな課題である。
○ 伸び悩みや行き詰まりを感じている生徒は，不安感・自己否定感を抱えており，「外向性」や「行動性」（自らの力を活かそうとする意欲や態度）の数値が低い。
○ １年生（今年時の２年生）は，学校・学級不適応観及び規律性の数値を４月に比べ低下させている生徒が，例年と比較し多い。

これらのことから，本年次研究主題を具現化するためには，次のことには特に留意し，研究実践を進めなければならないことを，昨年次確認した。

(今年次研究の留意点)

○ 「外向性」「行動性」の評価ポイントは，本校が掲げた望ましい子ども像の「○○しようとする」と大きく関わっていることから，「持続可能な社会の形成に向け，自らを活かす」という観点から考えれば，早急に対応，アプローチしていかなければならない課題である。
○ 「すべての生徒が伸びる」という観点から考えても，「共に学ぶ場」としての仲間との関わり合いの中で自分らしさを発揮して生きるという，学校ならではの特性を最大限に活かした教育活動を展開していくことが重要である。

４ 今年次研究の内容

研究主題が求めるところは，教育の「質」と「平等」の同時追求である。「質」と「平等」の同時追求とは，「生徒一人残らず，教科等の目標をＥＳＤの視点を踏まえた質の高い次元で達成させる」ということであり，生徒一人一人のもつ資質や能力を引き出し，そして，それを拡大させ，生徒それぞれがその立ち位置から伸びる，すなわち，「活きてはたらく確かな行動力としての『自立と共生の力』が育つ学びを一人残らず保障する」ということである。これを達成するため，昨年次研究の成果や課題を踏まえ，研究２年次の今年次は，学校全体としての次の点に焦点を絞り，研究実践を進めることとした。（後述「５研究計画」参照）

(1) 「育てる」から「育つ」への教師の指導観の転換
(2) 自尊感情の醸成と３つの「きょうどう」精神を発揮する学びの創造

(1) 「育てる」から「育つ」への教師の指導観の転換

ア 「育てる」から「育つ」とは？

教育とは「教」と「育」で構成される。「育」は「育てる」という他動詞でもあるが，「育つ」という自動詞としての意味もある。教師の指導観の転換とは，この自動詞としての「育つ」の論

理で教育実践への「まなざし」を変えてみようということである。「育てる」のではなく「育つ」という，生徒に内在する力をいかに引き出し伸長させるかということを重視するのである。

本校のこれまでの研究実践は，主に「何を教えるか」（教育内容），「どう教えるか」（教育方法），「どう学ばれるか」（教育評価）の三位一体的な教育研究アプローチで進めてきた。確かにこのアプローチは教師の授業力の向上に効果的で実効性のある研究手段であった。しかし，先述の通り，この研究視点で創り上げられた授業や学校行事等では「育てる」ことができない子どもが存在していることも事実である。

これまでの三位一体的なアプローチでは，主として「分からないこと」を「分かる」ようにする授業をいかに開発していくかという問題意識で研究が進められてきた。このときの教師の立ち位置は「教える」「分からせる」「理解させる」であった。しかし，このような教師の立ち位置ばかりでは，知識や概念の習得は可能であるが，変化の激しい時代に生きてはたらく確かな行動力を育むことができるのかは疑問である。

そこで，研究視点として，「育てる」から「育つ」の教育を創造することが必要だと考えたのである。例えば既成の知識を注入することから，自らの力で知識を獲得できるように「育つ」，型どおりに表現することから，その型を破り自分の表現を獲得できるように「育つ」，このような教育の質的転換を図るのである。

このような教育される側の子どもたちに潜在している自ら「育つ」力に注目した，「教える」から「育てる」，そして，「育つ」への「教育的まなざし」の転換は，「経験」と「指導」，「受動的学び」と「能動的学び」という座標軸の中でその像を捉えることができる（図１）[5]。ゾーンＡは，それなりの量を効率的に伝えられる反面，知識中心の学びであるため，生徒にその知識や考え方が定着するためには，その先の主体性を伴う経験が必要となってくる。ゾーンＢは，指導的な立ち位置の教師が教えたい内容を生徒に経験を通じながら捉えさせるスタイルであり，ゾーンＣは，経験を通じた能動的な学び（気付き）によって理解を深め，定着を図る学習スタイルである。つまり，「『育てる』から『育つ』への教師の指導観の転換」とは，教えられる側の状況に応じて，「教授型の指導」（ゾーンＡ）から「生徒を育てる」（ゾーンＢ）へ，そして「生徒が育つ」（ゾーンＣ）へと教育実践をシフトしくということである。このとき教師が意図しなければならないことは，ゾーンＢでは生徒の主体性を引き出し，ゾーンＣでは生徒の主体性を大いに発揮させるということである。「育てる」から「育つ」へ指導観の転換の具体を図２[6]に示した。

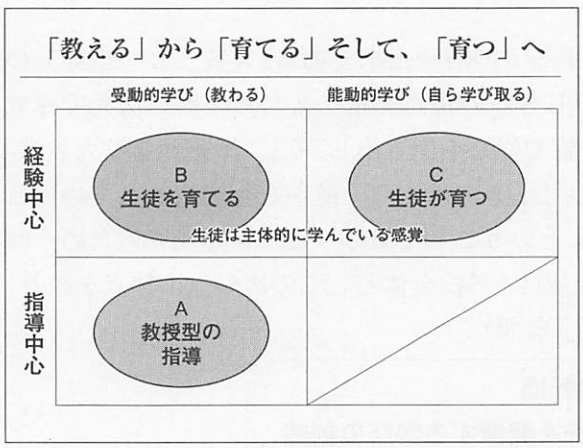


図１

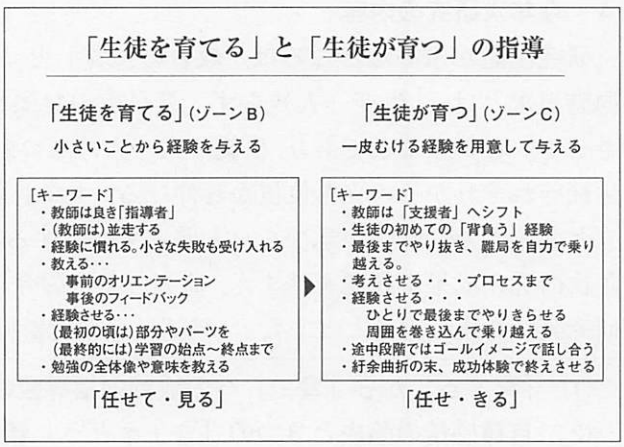


図２

この「育てる」から「育つ」の教師の指導観の転換というのは，「教師が何もせずに子どもたちがどんどん追究し，学びを深めていく」という魔法のようなことを求めているのではない。「生徒が育つ」ために必要な基礎的・基本的な知識や技能等を生徒が確実に習得する際の教師が「教

える」ことの重要性を認識した上で，「生徒が育つ学校とは？」「生徒が育つ授業とは？」という問いを常にもって研究実践を進めるということである。

以上のような，「育てる」から「育つ」の指導観の転換には，重要な要素がある。それは「自分ごと」としての意識の育成である。「自分ごと」とは当事者意識ともいえ，これがなければ，「育つ」あるいは「社会参画」にはつながってこない。すべての生徒がそれぞれに内在するものを，活きてはたらく確かな行動力としての「自立と共生の力」にまで伸ばすためには，必要なことは「教え」，同時に「自分ごと」の意識を育み，次に「生徒を育てる」から「生徒が育つ」への教師の「まなざし」の転換しかないと考えたのである。

では一体，「生徒が育つ」ためにはどのような「教師のしかけ」が必要なのか。それは，まずは「育つ」ために身に付けなければならない「基礎・基本」を確実に習得させることである。そして，その「基礎・基本」を生徒自らが自在に活用する学習活動を積み重ねさせることが大切である。この意味において，平成20年１月の中教審答申では学習指導要領の改善の方向性及びこれを受けた学習指導要領総則の教育課程編成の一般方針の趣旨を踏まえた学習活動を今一度吟味しなければならない。

イ　「基礎・基本」とは何を意味するのか？

学校教育法第30条第２項の規定を受け，文部科学省では児童生徒に育てるべき学力を「確かな学力」として，図３[7]のように示している。ここで注目すべきは２点ある。１点目は「確かな学力」として知識や技能はもちろんのこと，これに加えて，学ぶ意欲や自分で課題を見付け，自ら学び，主体的に思考し，判断し，よりよく問題解決する資質や能力等まで，実に幅広い要素が含められていることである。２点目は，これらの資質や能力等の中央に位置しているのが「基礎･基本」だということである。つまり，この図は，幅広い「確かな学力」の全体が身に付いたときに，はじめて「基礎・基本」が身に付いたということができる，ことを意味しているのである。このことを踏まえた上で，本校では「基礎・基本」を「持続可能な社会を形成に参画する上で土台となる資質能力」と捉え，各教科領域の特性に応じてそれを明確にして研究実践を進めることとした。[8]

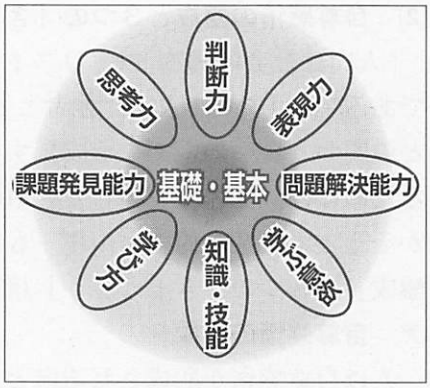


図３　確かな学力

ウ　「基礎・基本」を自在に活用させるためには何が必要か？

「持続可能な社会の形成に向け自らを活かす」ためには，身に付けたものを自在に活用できなければならない。しかし，本校の生徒の姿として各教科領域において，前単元で身に付けたはずの知識，概念や技能等を，今日のこの授業ではなかなか活用できなかったり，例えば社会科で習得したはずの概念を，技術・家庭科で活かすことができなかったりするという姿がある。

しかし，このことについて，市川伸一氏は，著書「考えることの科学」（1997年　中公新書）の中で興味深いことを述べている。

> 私たちの日常的な推論は，抽象的で一般的な形式に沿って行われるのではなく，領域固有性をもっている。（中略）つまり，それぞれの領域ごとの知識を使って，前提を解釈したり，推論を補ったりする。そのために領域が違うと形式上まったく異なる推論をすることがよくある。そしてまた，ある一定の推論様式を訓練したとしても，なかなか他の領域でそれが使えるようにはならないのである。（Ｐ22）
>
> 問題を解いた経験が他の問題の解決を促進するということは，心理学では転移という現象で扱われてきた。自然に類推が生じて転移がうまく起こるのはけっこう難しいことが実験的に確かめられている。（Ｐ146）

つまり，知識，概念や技能等を自在に活用できるようになることは「けっこう難しい」ということである。私たちはこのことを強く意識し，明確な意図をもって「自在に活用できるようにするための」指導の工夫等を設定した教育活動を展開しなければならない。「明確な意図」とは，各教科領域の特性等に応じて，知識，技能，概念等を活用できるように身に付けさせる「教師のしかけ」であり，身に付いた知識や技能，概念等を確実に活用させ，転移性のあるものに拡大させる意図的な「教師のしかけ」である。

すべての生徒に「自在に活用ができる本当の意味の『基礎・基本』を生徒に身に付けさせ」それを「活用できるようにしかける」ことは，先に述べた外向性や行動性を着実に育む教育活動を展開することに直結していることであり，「子ども像の『○○しようとする』を育む，効果的な学習指導等を研究・実践を進める」うえで大変重要である。

しかし，知識や技能，概念等を自在に活用させる「しかけ」だけでは，生徒個々に内在する力を活きてはたらく確かな行動力にまで拡大させるためには不十分である。自らを活かして「主体的に持続可能な社会の形成に参画」するためには，「自立と共生の力」を支える精神的エネルギーが同時に育たなくてはならない。

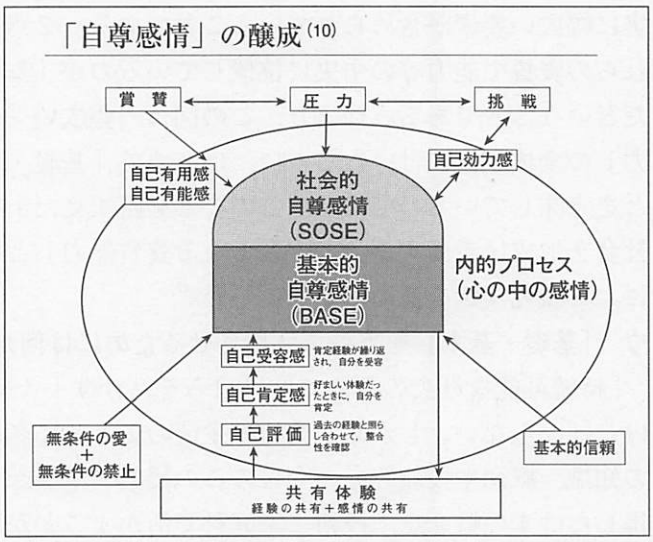
(2) 自尊感情の醸成と３つの「きょうどう」精神を発揮する学びの創造

「人間は社会的動物」（アリストテレス）であり，「人は常に他者とともに学ぶ存在」（佐伯胖）である[9]。つまり，人は，他者とともに社会を創りその中で生きる動物であり，また，その他者との関わり合いの中でこそ成長する生き物だということである。であれば，研究主題を具現化するためには，他者との関わり合いの中で他者とともに，持続可能な社会の形成に向け，自分を活かそうとする精神的エネルギーもまた育つ「しかけ」が必要となる。それを本校では自尊感情の醸成」と３つの「きょうどう」精神を発揮する学びに求める。

ア 自尊感情の醸成

人は自尊感情が醸成されるほど，自信をもって行動したり，進んで努力できたりする。このことは本校のこれまでの研究実践のみならず附属学校園で共通して明らかにしていることである。また，自尊感情を醸成するためには，学びの過程において，自分のよさや成長を認知させることの積み重ねが有効であることも明らかにしている。

社会学者のC・H・クーリーは自我を「自己感情」としてとらえ，その「自己感情」が「鏡に映った自我」として他者の認識や評価を想像を通じて知ることによって形作られるものとしている。つまり「他者」は「私」を理解する「鏡」の役割をしているのであり，その「鏡」によって「自己感情」は形成されるというのである。「自己感情」が他者（「鏡」）によって形成されるものである以上，その「鏡」の質が大変重要であり，この意味において，「自尊感情を醸成し合う関わり合い」は，「質の高い学びの場」（P11【本校研究の要諦】）「仲間との関わ





り合いの中で自分らしさを発揮」（P13【今年次研究の留意点】）という観点から見て非常に重要なファクターといえる。他者と学ぶ場である学校において，各学級集団が互いの自尊感情を醸成し合うような学び合いができる集団となれば，前述した「一人残らず，教科等の目標をＥＳＤの視点を踏まえた質の高い次元で達成」する学び自体が促進されるはずである。また，自分のよさや成長を他者（社会的）に認められ，自尊感情が醸成されることの積み重ねは，「持続可能な社会」の形成に向けた確かな行動力としての「自立と共生の力」を支えるエネルギーが育つことに直結していると考える。

イ　３つの「きょうどう」精神を発揮する学び

「ＥＳＤの10年実施計画」では，「環境の保全，経済の開発，社会の発展を調和の下に進めていく」ことの重要性が述べられている。しかし，これらはトリレンマ［３Ｅのトリレンマ……経済の発展（Economy），環境の保全（Environment），エネルギーの確保（Energy）の３つは相互に影響し合いながら「こちらを立てればあちらが立たない」という矛盾した関係になっている。］の関係性にあり，簡単に調和が図れるようなものではなく，現代社会において人類の課題とされるもののほとんどが，このトリレンマの関係性の中で解決策が見いだされていないのが現実である。さらに近年拍車がかかっている「私事化」（私的なものへの関心が高まるあまり，個が社会や集団への関わりを弱め，私生活のみに隠遁する傾向や自分を大切にするあまり，自己利害の追求だけが突出する傾向）する社会の中で，「持続可能性が危機にある状況」となっている。

このような状況の中で，重視しなければならないのは，「多様なものがつながり合って新たなものを生み出す思考の重視」[11]であり，「みんなで相談しながら創造的に問題解決していくプロセス」[12]である。このような「思考」と「プロセス」こそ，ＥＳＤで重視される「他者とともに新たな何かを生み出す経験」だと考える。「他者とともに新たな何かを生み出す」ためには（主体的に持続可能な社会の形成に参画するためには），持続可能な社会の形成を意識した「確かな『自己―他者―社会』観」が必要不可欠である。これを本校では「３つの『きょうどう』精神を発揮する学び」に求めるのである。

３つの「きょうどう」精神とは，［「共同」（一心同体）・「協同」（一致団結）・「協働」（一燈照隅）］の精神であり，具体的には本校では以下のように捉えている。これら３つの「きょうどう」の精神を，時と場に応じて出せる人間の育成が必要だと考えたのである。

> 【共同】…集団・全体のために，自分や仲間の私事的なことを出さずに自分を活かす
> 【協同】…目的を果たすために，他者とともに，みんなで力を合わせながら自分を活かす
> 【協働】…社会のために，自分のために，自分の役割を果たし自分を活かす

「○○のために自分を活かす」ことに着眼した「きょうどう」の精神を発揮する学びは，「自分のため」にという視点のみならず，「誰かのために」という視点で学ぶことにつながり，ひいては自分は「周りに支えられている」という感覚のみならず，さらにそこから，きっと自分は「だれかを支えている」という認識の転換につながるものであると考える。この「きっと自分はだれかを支えている」との認識を生み出す学びは，確かな行動力としての「自立と共生の力」が育つ学びを構成するうえでは大変重要な要素だといえ，また，様々な違いのある生徒どうしが，自己を活かし合い，伸ばし合う集団となるための根幹となる認識だと考える。

また，自分のよさや成長を他者（社会的）に認められ，自尊感情が醸成されることを積み重ねさせることの重要性を前述したが，この３つの「きょうどう」精神が発揮される学びは，工夫次第で自尊感情の醸成を同時に成す学習活動になり得るものと考えている。それこそが質の高い生徒どうしの学び合いを支えるものだと確信している。

5　研究計画

本研究主題のもとでの研究を３か年研究とし，次のように研究計画を立てている。

(３年間の研究)

研究年次	研　　究　　方　　法
１年次	○各教員が，研究主題のもと研究テーマを設定し研究・実践を行う。一つの研究に対して，教育学部大学教員１名以上と共同研究を進める。
２年次	○１年次の研究の成果と課題を集約し，学校全体としての研究の焦点化を図る。これを基に，研究の深化を図る。 ○各教科領域の研究テーマに対する評価を行い，研究をよりよいものにしていくとともに学校の研究主題に対する研究の評価内容や方法を検討する。
３年次	○２年次の研究成果と課題を基に，さらに研究の深化・統合を図る。 ○学校の研究主題に対する研究の評価を行う。

今年次も昨年次と同様に，研究主題を具現化する研究テーマを各教科領域で設定するとともに，それを基盤として各個人においても研究テーマを設定し研究・実践を行う。教科領域毎に「持続可能な社会を形成する土台となる資質能力」とはどのようなものか，また，生徒がそれらを習得，活用しながら，確かな行動力としての「自立と共生の力」がすべての生徒に育つ教育活動を展開するためには，何をどうすることが必要なのか（Ｐｌａｎ），それを可能にするため各単元等でどのような指導の工夫を設定し，実践するのか（Ｄｏ），そして，それが授業（単元・題材）で確かに育ったのかどうか，さらには，何がうまくいってうまくいかなかったのか（Ｃｈｅｃｋ），どのようにすればよかったのか（Ａｃｔｉｏｎ），という問いを常にもって実践していかなくてはならない。以下のＰＤＣＡサイクルを機能させ，すべての教科領域で実践的な研究の推進と授業の質の向上を目指す。

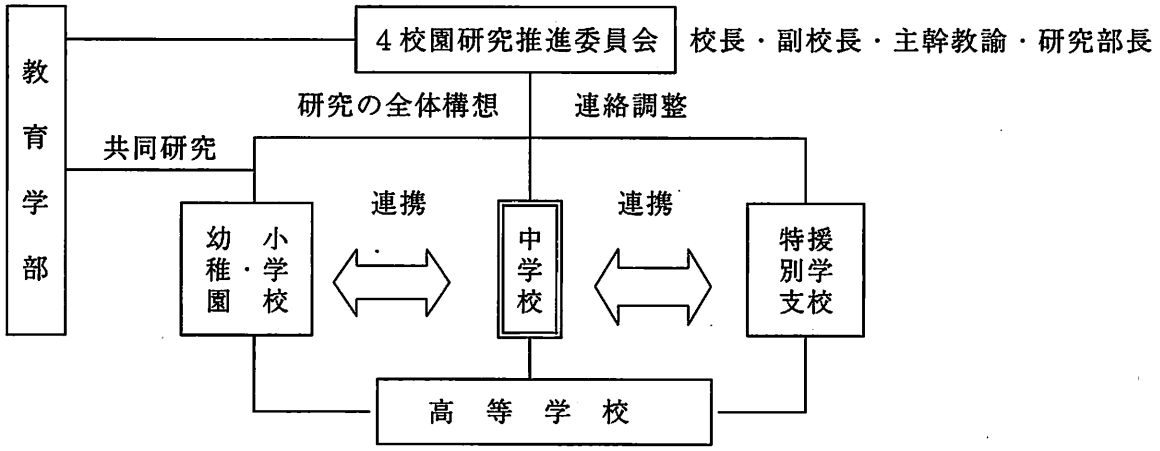
(本年次研究)

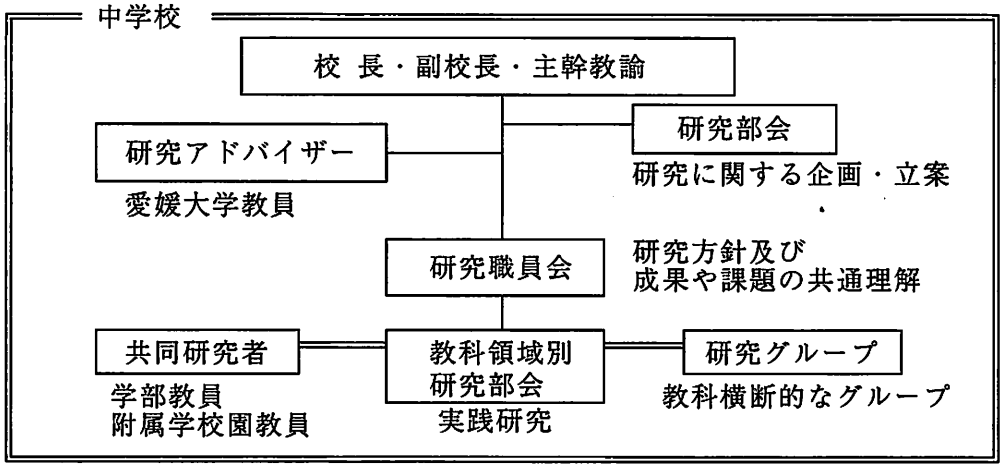
時　期	研　　究　　内　　容	サイクル
４～５月	研究テーマ（各領域・各個人）の設定 研究計画書の作成	Ｐｌａｎ
５月	校内研修会１（中旬）※ 全校体制の授業研究 校内研修会２（下旬）※ 外部から講師を招いた学習会 講師：北川達夫先生（日本教育大学院大学客員教授）	
５～９月	年次研究授業の実施	Ｄｏ
７～11月	研究紀要の作成	Ｃｈｅｃｋ
11～２月 ２月20日 ～３月	研究大会に向けた授業準備 第94回愛媛教育研究大会（中学校の部） 研究の総括と次年次研究の展望	Ａｃｔｉｏｎ

6　研究組織

今年次も各教科領域を基盤として研究を進める。その際，研究１年次以上の連携を強く意識しながら，本附属校園や大学教員との共同研究を進めることにより，研究実践の客観性を高め，質

の向上を図る。さらに，校内での教科横断的な研究グループを組織し，全教員が研究主題等への共通理解を図りながら研究ができる体制を整えた。





7　教科領域別研究テーマ

教科領域	研　究　テ　ー　マ
国　語	仲間との関わり合いの中で表現力を高める学習指導の工夫
社　会	社会にふみだす「知」の形成 ～学び合い，互いに考えを広げ深める学習活動を通して～
数　学	数学的な見方や考え方を高める学びの創造
理　科	すべての生徒が主体的に学ぶ理科学習の展開 ～仲間との学び合いを通して～
音　楽	音故知新！　幸せ感じる音楽の力
美　術	豊かな感性を刺激する視覚的アプローチの研究 ～ＩＣＴを活用したビジュアルコミュニケーションを目指して～
保健体育	運動・スポーツの主体的な実践者の育成

技　術 家　庭	社会の変化に対応し，持続可能な社会の実現を目指す生徒の育成
	技術分野：生活の技術を見つめ，学び合いを通して主体的に行動する生徒の育成
	家庭分野：「いかに生きるか」という視点を大切にした学習の展開
英　語	仲間との関わりの中で，すべての生徒が主体的に学ぼうとする英語授業
行く河	生徒が自分らしく生き抜くための支援

※ 「行く河」は，生徒の自立の心を育むことをねらいとし，教育心理学からの理論的・実践的アプローチを教科横断的に設定するものである。

※ なお，次ページの図は，ここまで述べてきたことを中心に，本校の研究構想をまとめたものである。

注

(1) 「『自立』及び『共生』の力」は，OECD DeSeCoプロジェクトの「知識基盤社会で生きていくためのキー・コンピテンシー」やESD－Jが提唱する「価値観」・「育みたい能力」・「学びの方法」を参考に設定

(2) 2012愛媛大学教育学部附属中学校研究報告集（研究紀要） p 219 ～ 228

(3) 2010 ～ 2012愛媛大学教育学部附属中学校研究報告集（研究紀要）を参照

(4) 2013愛媛大学教育学部附属中学校研究報告集（研究紀要） p 229 ～ 234

(5) 博報堂大学編（2014）「『自分ごと』だと人は育つ」日本経済新聞出版社p87を参考に作成

(6) 同　p 71を参考に作成

(7) 文部科学省ホームページより

(8) 各教科領域で明確にした「持続可能な社会を形成に参画する上で土台となる資質能力」は各教科領域の研究テーマ及び各個人研究のテーマ設定の理由を参照していただきたい。

(9) 佐伯胖（1995）「『学ぶ』ということの意味」岩波書店

(10) 近藤卓「自尊感情と自己肯定感・自己効力感との関係は？」(ほんの森出版「月刊学校教育相談」2011，８月号）より

(11) 多田孝志「授業で育てる対話力―グローバル時代の『対話型授業』の創造」(2011年）教育出版

(12) 清宮普美子・北川達夫「対話流　未来を生みだすコミュニケーション」(2009年）三省堂

第Ⅱ部
教科領域別研究





